

## ITP-AA 最終報告書

モハメド・オマル・アブディン

### 【派遣先と派遣期間】

今回の派遣計画においては、私はハルツーム大学附属平和研究所とロンドン大学東洋アフリカ学院に籍をおき、研究活動に従事しました。

- ・2010年7月2日～2010年10月14日 ハルツーム大学附属平和研究所
- ・2010年10月15日～2011年2月28日 ロンドン大学東洋アフリカ研究学院

### 【ハルツーム大学附属平和研究所における研究活動】

2005年に調印されたスーダンの包括和平協定に先立った和平交渉プロセスに深く関与したアルタイブ・アティイア教授のアドバイスを受けつつ、スーダンアーカイブハウス、ハルツーム大学中央図書館、及びスーダン国内で出版された関連先行研究の収集を主たる研究目的としつつも、政治家、ジャーナリスト、研究者に対してインタビューを実施することをもうひとつの研究目的とした。提出済みの月次レポートに書いたとおり、私がスーダンに滞在した7月から10月中旬は南部の独立を問う住民投票を控えた時期であり、大半の政治家がその歴史的出来事と独立に付随するさまざまな変化に備え、以前に実施した調査時と比べて、口を硬く結んでいたように感じた。このため、信用できる情報を引き出すことはいささか困難であった。しかし、現地調査をするにつれ、協力的になってきた政治家も増えてきたことから、今後さらなる現地調査を実施するにあたっては、大変大切な一歩であったといえます。

### 【ロンドンにおける研究活動】

ロンドンでは、SOASのチャン教授をメンターとして、研究に対して助言などをいただきながら、同大学図書館に所蔵されているスーダン関連著書をピックアップし、私にとってアクセス可能な形にしていただくためのスキャンおよびテキスト化作業を補助者にお願いしました。

12月から2月にかけて複数のスーダン情勢関連イベントに出席し、積極的に質問をし、世界的に著名なスーダン研究者と意見交換をすることができ、また、今後の自分の研究に対するアドバイスをいただくことなどをお約束いただきました。

先行研究の収集と英国の複数のスーダン研究者との交流、そしてチャン教授との意見交換はロンドンでの最大の研究成果といえます。

### 【派遣終了時点における学会および論文投稿に関する状況】

今回の派遣終了時点においては、私は以下の学会へ発表概要を送っており、本報告書提出時までにアクセプトされたもの、及び、発表済みのものを記載します。

### 発表（予定）学会リスト

1 The International Conference of Postgraduate Students (March 5<sup>th</sup> - March 7<sup>th</sup>)

主催：Tokyo University Center of Philosophy

発表題目：The right to self-determination: a new Challenge to national identity in African states

2 米国スーダン研究会第30回年次ミーティング (2011年5月12日～15日)

開催場所：The Center for African Studies, Ohio State University (USA)

発表題目：Political Mobilization in Post-Referendum North Sudan

3 日本アフリカ学会年次大会 (2011年5月21～22日)

開催場所：弘前大学

発表題目：南部独立後スーダンはどこにむかうのか？国家と宗教問題をめぐる議論の変容

4 英国中東学会の年次大会 (2011年6月26日～29日)

The British Society of Middle East Studies Annual Conference (June 27<sup>th</sup> to 29<sup>th</sup>)

開催場所：Exeter 大学 (英国)

発表題目：The Impact of the Intra Northern Power Struggle on the Implementation of the CPA in Sudan.

5 日本国際政治学会 (2011年11月11日～13日)

開催場所：筑波大学

発表題目：Peace Agreements as Means of Political Exclusion: An Analysis of the Political Context of the Sudanese Peace Agreements

最後に、本派遣をサポートしてくださった ITP 委員会をはじめ、東京外国大学事務局のさまざまなご配慮、ならびに納税者の皆様にお礼申し上げます。世界レベルで、質の高い研究を目指し、それを恩返しとさせていただきます。どうもありがとうございました。